

# 特集 触の可能性を問う

特別展「ユニバーサル・ミュージアム」ができるまで

「&コロナ」の大博覧会 広瀬浩二郎

「さわる」特別展ができるまで 日比野尚子

誰のための点字フライヤーなのか 桑田知明

「さわる」感覚を補完する 原宏一

ユニバーサル・ミュージアムをデザインする 北村彰



# 思ってたんとちがう ——新しいイメージの構築を求めて

高見直宏

私は視覚障害者である。学生時代に、網膜色素変性症であることが発覚し、それから現在まで少しずつ、見えなくなっていく日常を送っている。

症状が出始めた当初は、見えない事への恐怖や、思うように事の進まない現状への失望感に、苛まれる日々が続いた。だが、今振り返ると、視覚情報を過度に信じ、それに頼りきった毎日を過ごしていたようにも思える。また、この頃から私の中で、視覚から触覚への、メイン感覚の移行期間が、始まりつつあったのかもしれない。

私がそれに気付かされたのは、ある日の夕方の事だった。自宅作業場で、木を彫る私への、妻の何気ない一言、「そんな暗い所で、よく彫れるねえ」によって、私は我に返った。その日、私は朝から制

作を始め、夕暮れ時になっても照明を点けず、自然と彫りを進めていたのである。自分でも知らぬ間に、自作をさわりまくり、手探りで得た触覚情報を手掛かりにして。

月日を経て今では、触覚メインの生活に慣れ、それを楽しみつめる自分がある。触覚、触察の良いところが、段々と分かってきたのである。「百聞は一見に如かず」という言葉が示す通り、何事にもスピードが求められる現代社会において、視覚情報が重視されることに、何ら疑問は持たない。しかし、物事をより深く理解しようとした時、「観ただけで満足し、分かった気になっていないか」という、どこからともない問い掛けが、私の心に浮かんでくる。視覚による観察メインの環境は、短時

間で多くの情報を得られるがゆえに、物事への更なる興味や、より強い探究心を衰えさせてしまう危険性を、孕んではいないだろうか。一方、触察メインの環境には、真逆の優位性を感じている。さわればさわるほど、より興味が湧き、どんどん知り、また探したくなる。自分が心に思い浮かべたイメージとの整合性を、確かめたくなるような衝動にも駆られるのだ。ついつい没頭してしまう、楽しく豊かな時間がそこにはある。今現在の私の作品制作は、まさにそれそのものに他ならないのだ。

今回の特別展「ユニバーサル・ミュージアム」は、皆様に触察を楽しんで頂く為に開催され、私も作品を出品する。もちろんだが、観る前にさわって欲しい。もつと言ってしまう、さわりに来る前に、思いを巡らせて頂きたい。きつと、思ってたんとちがう、新しいイメージを得られるに違いない。ゆっくり、じっくり楽しんで、そこで得た新しいイメージと豊かな触覚を、お持ち帰り頂ければ幸いです。

## 目次

- 1 エッセイ 千字文  
思ってたんとちがう  
——新しいイメージの構築を求めて  
高見 直宏
- 特集  
“触”の可能性を問う  
——特別展「ユニバーサル・ミュージアム」  
ができるまで
- 2 「&コロナ」の大博覧会  
広瀬 浩二郎
- 5 「さわる」特別展ができるまで  
日比野 尚子
- 6 誰のための点字フライヤーなのか  
桑田 知明
- 7 「さわる」感覚を補完する  
原 宏一
- 8 ユニバーサル・ミュージアムを  
デザインする  
北村 彰
- 10 みんぱく回遊  
スパイスをめぐる旅  
松尾 瑞穂
- 12 みんぱくインフォメーション
- 14 ○○してみました世界のフィールド  
ペルーより日本の祖先を追いかけて  
ダニエル・ダンテ・サウセド・セガミ
- 16 世界のバスケットリー×バスケットリーの世界  
縄文人の植物資源利用  
佐々木 由香
- 18 シネ倶楽部 M  
軍事政権下の名作  
——「水祭りの雨」  
山本 文字
- 20 こたばの迷い道  
遺跡に名前をつけるとき  
大谷 育恵
- 21 編集後記・次号の予告

## 表紙

Yoko-Sonya作《想像開花模様/Flowering Imagination》  
2021年  
(特別展「ユニバーサル・ミュージアム——さわる! “触”の大博覧会」、セクション6「見てわかること、さわってわかること」に展示)

## プロフィール

1973年東京都生まれ。彫刻家。東京藝術大学大学院美術研究科彫刻専攻修了。東京藝術大学美術学部彫刻科非常勤講師などを経て、現在は代々木ゼミナール造形学校彫刻科主任講師。学生時代に網膜色素変性症であることが発覚し、その後症状の進行に応じて、徐々に写真ではないイメージの形を追うようになる。おもに木を素材とした彫刻を制作、発表している。

# 特集「触」の

# 可能性を問う

特別展「ユニバーサル・ミュージアム」ができるまで

今回の特別展では、「見る」のではなく、「さわって」展示を楽しもう。展示場には「さわると、より深く理解できる」アート作品が大集合。全身の触覚を駆使して「創る」「使う」「伝える」実体験が楽しめる。本号では「さわって」楽しむための展示場の工夫や、図録などの印刷物の仕掛けを紹介する。特別展が作られる過程を追いながら、誰もが楽しめる博物館のあり方を考えよう。

特別展  
ユニバーサル・ミュージアム  
——さわる!“触”の大博覧会  
会期:2021年9月2日(木)~11月30日(火)  
場所:特別展示館



「試触コーナー  
——なぜさわると、どうさわると」  
株式会社三木製作所所蔵  
《富士山立体地図》2021年

※セクション名は特別展の展示内容に即しています。  
※本稿掲載の作品画像は、本頁下の写真をのぞき、平垣内悠人氏による撮影です。

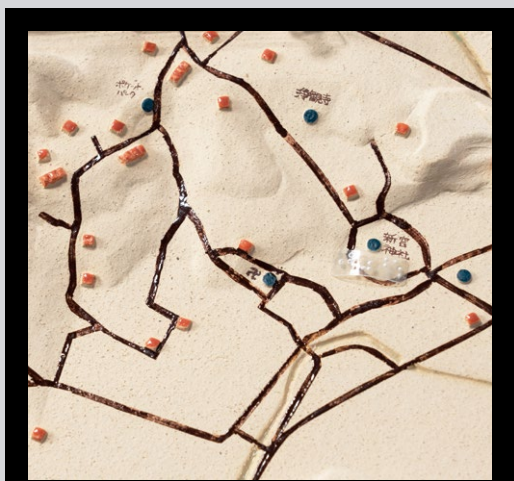


セクション1「彫刻を超越する」  
北川太郎作《時空ピラミッド》2016年  
(撮影:加賀雅俊)

## 「&コロナ」の大博覧会

ひろせ  
広瀬 浩二郎

民博学術資源研究開発センター



セクション2「風景にさわる」  
矢野徳也、さかいひろこ作《ユニバーサル触地図》2021年

当初、おまえは僕にとって紛れもなく憎き敵だった。おまえが猛威を振るうなか、「ソーシャルディスタンス」という語を耳にする機会が増えた。今日に至るまで、各方面で人・物との距離を取ることが求められている。一方、人・物との濃厚接触によって成り立っているのが視覚障害者の日常である。僕の研究、そして人生そのものはさまざまな人びとの触れ合いにより育まれてきた。「接触」悪」と決めつけられる風潮の下で、僕は自己の存在が全否定される危うさを味わった。僕が普及に取り組み「さわる展示」に対しても、おまえは強烈な逆風を吹かせている。楽天家の僕も、「なぜこの時期にコロナが……」と、何度も溜め息をついた。おまえとのつきあひも、もう一年半ほどになる。



最近、おまえに対する僕の意識が変わった。たしかに、「非接触」を強制するおまえの立場は、僕とは真逆である。近代とは視覚優位・視覚偏重の時代といわれる。人類に「さわらない・さわれない・さわらせない」生活を強いるおまえは、視覚の勝利、近代化の完成を決定づけるためにやってきたのだと、僕は考えていた。でも、少し違うのかもしれない。なぜ、現代人はおまえを過度に恐れ、嫌うのか。それは、おまえが「目に見えない」ウイルスだからである。新型コロナウイルスは僕たちの周囲にうごめいているが、その姿を肉眼でとらえることはできない。視覚に依存する現代人に対し、「目に見えない」世界を忘れてはならぬというメッセージを伝えるために、わざわざおまえはやってきたのではなからうか。

セクション1「彫刻を超越する」  
高見直宏作《群雲——エクトプラズムの群像》2021年

リモートワーク、オンライン会議など、おまえの出現後、「新しい生活様式」が定着した。「新しい生活様式」は僕たちに恩恵をもたらす一方、対面でのコミュニケーション、触れ合いでしか生まれない人間本来の文化の大切さを想起させるきっかけともなった。「新しい生活様式」への移

### コロナへの手紙

よくもまあ、僕のやることをここまで邪魔してくれるものだ。おまえのしつこさにはあきれしてまう。

自分の研究活動の集大成という位置付けで、僕は二〇二〇年の秋に特別展を開催する準備を進めてきた。ところが二〇年の二月ごろから、おまえの登場で世間は大混乱、展示の実施が怪しくなった。四月に緊急事態宣言が出て、特別展の延期が決まる。僕の思いは蹴散らされ、おまえ、すなわち新型コロナウイルスは感染拡大を続けた。



セクション3「アートで対話を拓く」  
松井利夫作《つやつやはらわた》2021年

行が、「古い生活様式」の再評価につながったのは興味深い。

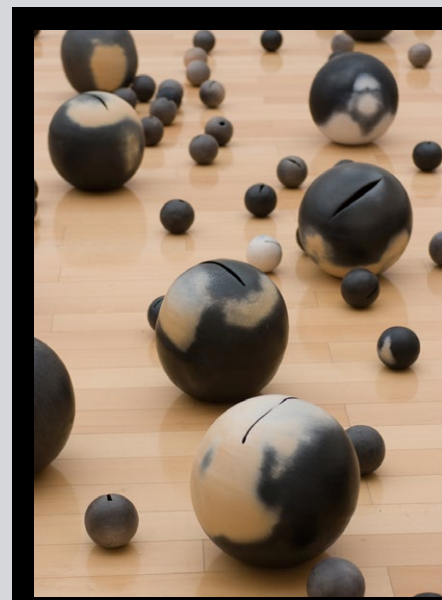
### 特別展の隠れ実行委員

おまえの真の目的は、視覚優位・視覚偏重の世界に生きる人類への問いかけである。「ほんとうに、このままでいいのかい」。多種多様な資料を集め、「触」の可能性を示すのが僕のやり方だとすれば、まったくさわらない・さわれない状態を創出し、そこから「触」の必要性を逆照射するのがおまえのスタンスといえる。なんと過激なシヨック療法なのか。

僕は、多くの尊い命を奪ったおまえと一緒に「ウィズコロナ」の展示会をおこなうつもりはない。と、おまえを克服すべき対象として、「ポストコロナ」を主題とすることにも違和感がある。そこで考えた、「&コロナ」の展示会はどうだろう。民博着任から二〇年。僕は仲間とともに触文化の研究、展示やワークショップの実践を積み重ねてきた。おまえがいよいよといまいと、僕たちの研究成果を発表する特別展の趣旨・内容は普遍（ユニバーサル）である。ただし、おまえが僕たちの計



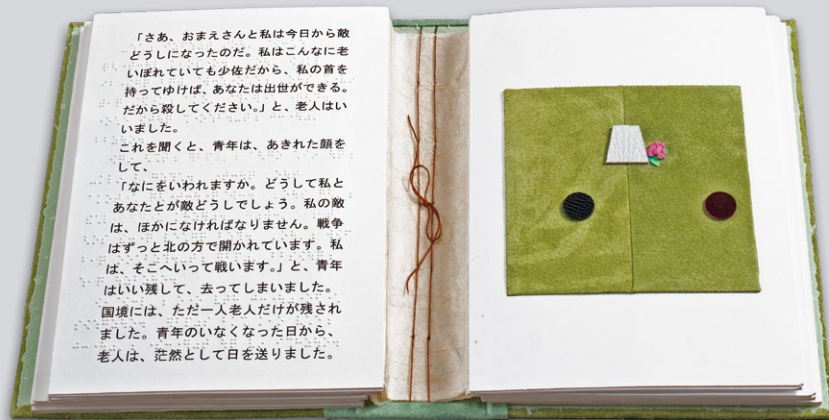
セクション4「歴史にさわる」  
堀江武史作《服を土偶に》2020年



セクション5「音にさわる」  
渡辺泰幸作《土の音》2008年

画に乱入してきたことで、展示コンセプトが鍛えられたのたしかだろう。誤解を恐れずに言えば、おまえは特別展の開催を阻む邪魔者ではなく、特別展を深化させるための実行委員なのである。

今回の特別展は、コロナ禍が終息しない状況下、あえて「触」の意義を訴える試みとなる。「こんな時期に、さわる展示を開くなんてけしからん」「会場を暗くして触覚による鑑賞を奨励する演出は、来館者の見る楽しみを損なう」など、批判の声が寄せられるだろう。もちろん、こちらも簡単に退くつもりはない。自信と責任をもって、三カ月の特別展を成し遂げる決意である。来館者の批判を受けて僕が弱気になったとき、おまえはシヨック療法をちらつかせて、僕を叱咤激励するだろう。「なんだ、君の自信・責任はこの程度なのか。それなら俺がまた大暴れして、展示物にさわらない・さわれないようにしちゃうぞ」。いや、それは困る。隠れ実行委員のおまえが表に出ないことが、特別展を成功させる必須条件なのだから。「&コロナ」の特別展は、僕一人の力では実現できない。「さわる展示」のあり方を僕とともに模索し



セクション6「見てわかること、さわってわかること」  
真下弥生作《触察本》2021年

が集い、今「&コロナ」の大博覧会が始まる！

てきた「ユニバーサル・ミュージアム研究会」のメンバー。安心・安全にさわることができる環境を整えるために知恵を絞ってくれる館内の保存科学チームの教員。出展者との交渉を進め、スケジュールや予算を調整する企画課の職員。さらには、前例のない大規模な「さわる展示」のプランに賛同し、出展協力してくださる方々。多くの人の「手」

「さわる」特別展ができるまで

今回の特別展 実行委員長は、「さわるプロ」。

「虫」は物の「触」の対話の手段です

実行委員長が全国各地を訪ね、出展作品を「さわる」で選定します。

新作を出展する作家さんに、作業進捗を確認。

未完成です

今週は西日本をぐるりと

作品は、みんなの企画課職員と輸送会社さんなどで、各地にお迎えに行きます。

木梱包材は作品にあわせて用意

特別展示館

「作品を守る」「安心してさわる」ことができる「軸」に。

展示方法を工夫します。

※転倒を防ぐために凹みにおさめる

「さわる」感覚を楽しむために、展示場の照度を細かく調整。

安全性は？

可読性は？

展示台の高さや角度は、作品のさわりやすさを考慮して設計します。

この高さが自然で良いですね

展示作品と濃厚接触をする準備はできましたか？

展示デザイナー

画: 日比野 尚子 (イラストレーター)

# 誰のための点字フライヤーなのか

桑田 知明

グラフィックデザイナー  
本展グラフィックデザイン担当

「さわる」と「さわれる」の違いは何だろうか。前者は触覚で情報を得ることを指し、後者は触覚情報を視覚でも得ることと考える。「さわる」とは、主たる情報が触覚に依拠し、触覚情報のみでも情報は担保されている。一方で、「さわれる」とは、主たる情報が視覚に依拠しているために、必然的に視覚情報を触覚表現へ展開することとなる。そして、触覚情報は視覚表現を前提としているため、視覚から触覚情報を取得するということが起こりうる。つまり、視覚情報のみで情報が担保されていることから、さわらないことを誘発しかねないのだ。

## 触覚情報から視覚表現を模索

この「さわると」「さわれる」の意味の違いは、印刷物のフライヤー（美術館や博物館などの展覧会やイベントのお知らせをおこなう紙の広報物）にも当てはめて考えることができる。

「さわれるフライヤー」は、視覚、触覚のいずれでも情報を取得できるので、一見大変便利なものであるように感じる。しかし、触覚情報を視覚で得ても、それは過去の経験から触覚のイメージを膨らませることに留まるだろう。どちらの感覚でも同じ情報を享受できるとは限らず、さわらなければわからないことが、実際には存在するのだ。

# 「さわる」感覚を補完する

この原稿を書いている六月下旬の時点で、出展リストは固まり、出展作品の撮影もほぼ終えた。いつもなら、この時点で、展覧会がオープンしたときの風景や、会場で受ける感動も大まかに想像できる。そのイメージをたぐり寄せるようにして、関係者による校正をすすめていけば、図録の完成まで一直線だ（ときに、展覧会オープンに合わない夢を見てうなされながらも）。

しかし今回ほど、完成イメージが描きにくい展覧会はない。なんといっても、見ただけではわからないのだ。図録というのは、どうしても視覚に頼ったメディアだ。今回の図録制作では、そのジレンマが常につきまとう。展覧会の記録を後世に伝えるという使命を第一に、特別展のポイントである「さわる感覚」を補完できるような図録になるよう、可能な限りの工夫を考えてみた。

## さわりたいくなる図録

まず、出展作家全員に少し長めの文章をお願いした。一人六〇〇字か一二〇〇字で、出展作品によせる文章を自由に書いてもらった。単なる作品解説を超えて、作家の周到な意図や、既存の世界観に揺さぶりをかけるような狙いなど、作品の背景を理解することができるようになっている。原則として、見開きの左のページに作家のことは

フライヤーをさわる情報ツールとすることの理由に、さわることでフライヤーが相性のよい組み合わせだということがある。紙へ情報を印刷・加工するフライヤーは、人が手にとることを前提としており、手にとられることで情報が伝わる。この「手にとる」というさわる行為を活かし、「さわるとさわれる」として情報発信することはとても理に適っている。

フライヤーでさわるという要素を扱う際には、フライヤーの情報を触覚で表現し、それを踏まえて、触覚情報を視覚表現へ展開することが求められる。このように、さわるということを目的にするならば、主たる情報源が触覚となり、触覚情報を視覚表現へ置き換えることのできるデザインを模索するべきだ。しかし、視覚優位な社会のなかでは、視覚情報を前提として触覚表現をおこな



本特別展のフライヤー

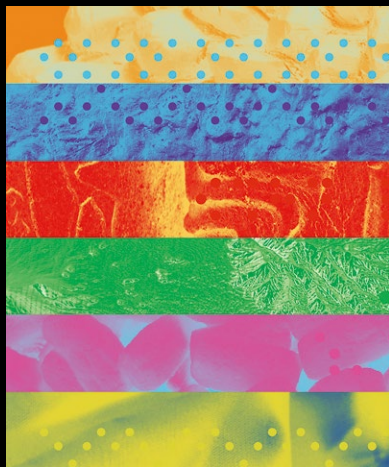
原宏一

合同会社小ざ子社代表  
本展図録編集者

を、右に作品の写真と並べた。さわるガイドとして利用するのも、また、さわった後に、自分の感動と作家のことは照合するのもよいと思う。この特別展は、一度では絶対に味わい尽くせない。何度でもリピートして楽しんでほしい。作品の写真についても、その多くを図録用にあらたに撮影した。素材感や立体感が出るような心がけた。また、ブックデザインを手がけた桑田知明さんのアイデアで、多くの作品では、実寸の部分図版も掲載した。これも、さわる体験を補完できるようにという工夫だ。

## 「ユニバーサル・ミュージアム運動」の到達点

そのほかの特徴としては、ユニバーサル・ミュージアムに関係する論考、コラムを充実させている。本書は、ユニバーサル・ミュージアム研究会の一〇年にわたる歩みの集大成という意味ももつ。「ユニバーサル・ミュージアム運動」の現在の到達点を示す論考・コラムを、民博の教員やユニバーサル・ミュージアム研究会のメンバーを中心に執筆してもらった。論考・コラムは、各章（展示の各セクションに対応している）にテーマに合わせて配置し、最後に「ユニバーサル・ミュージアムの未来」という図録オリジナルの章を設けた。本書編者でもある広瀬浩二郎氏の「総論」や「結語ならぬ決語」も充実していることはいうまでもない。総論



特別展フライヤーのグラフィック一部。点字が背景の色に溶け込んでおり、視覚では読むことができない

うために、さわるということを目的としながらも、無意識のうちに「さわられるフライヤー」を作る手順を踏んでしまうことが多い。

## 触覚と視覚が互いにかかり合っデザイン

今回の特別展では、「さわるとさわれる」制作に挑んだ。デザインの要素を「墨字（ひらがなや漢字などの文字）」と「点字」「色と点字」とし、さわらなければ情報が取得できない仕掛けも施している。表面には出展作品の表面の素材の写真と並べ、それぞれ異なる二色の組み合わせでダブルトーンに加工し、その上に無色透明なUV硬化型ニスで点字を施している。このような箇所は、目には、点字が出現したり消失しているようにしか見えず、さわらなければ明確な情報を得ることはできない。またフライヤー上半分へは、特別展の名称やキャッチコピーなどの点字情報だけでなく、点字模様を作ることでもデザインとしても取り入れた。点字で模様を作るとい遊びをとおして、点字ユーザーの方のみならず、点字になじみのない方にもさわることの可能性を自分ごととして探り、楽しむきっかけになっしてほしい。

四名、出展作品に関する文章三五名、論考一四名、コラム七名の総勢六〇名の執筆者となった。

さわる体験の後に民博で購入するのが最善だが、一般流通する書籍なので、全国の書店でも入手可能である。視覚障害などで本書の文字情報にアクセスが難しい方へは、付属の「テキストデータ引換券」と交換で、テキストデータ提供も可能だ。テキストデータは、パソコンの読み上げソフトなどにより、音声で再生可能である。ぜひ多くの方に手にとっしてほしい。



右：図録のジャケット。特別展フライヤーと同様のデザイン上の工夫が凝らされた、UV印刷による「さわるとさわれる表紙」となっている（前ページ参照）

左：図録中面。わたる（石川智弥+古屋祥子）による《てざわりの旅》のページ。右のページの下に、作品の袖部分の実寸図版を掲載している

北村 彰 きたむら あきら ID&L DESIGN WORKS 代表  
本展展示デザイナー

## ものを介した自己との対話

この原稿を書いている六月現在、大阪ではコロナ禍で緊急事態宣言が延長され、「書を捨てよ、町へ出よう」というわけにもいかず、巣ごもり状態が続いている。食器などの生活用品をネットで探しても、やはり現物の手触りなどを確認せずに購入するのは気が引ける。それは博物館についても同様で、臨時休館が続く博物館の多くがインターネットをとおした紹介動画などの配信に力を入れているが、やはり博物館で出会う実物資料との一期一会の感動はバーチャルでは味わえない。博物館で実物を見るということは、視覚だけではない身体感覚、展示されている空間、同行者との会話なども含めた多様な接触行為の総体なのかもしれない。

二〇〇〇年に神戸で開催された「ダイアログ・イン・ザ・ダーク」というイベントに参加した。参加者は数人のグループとなり、完全に光が遮断された暗闇空間を手探りで歩き回ってさまざまな生活シーンを体験する。ここでは視覚障害をもつスタッフが案内してくれるのだが、視覚以外の感覚がすっかり退化した我々とは、暗闇では立場が逆転する。暗闇が日常の彼らにはそこにあるも

のがちゃんと見えている。そして驚くことに暗闇でしばらく過ごす視覚以外の感覚が覚醒しはじめ、自分にも暗闇に潜むものが知覚できるようになってくる。

わたしは、民博の本館に二〇一二年に開設された「探究ひろば」を設計したが、そのなかの「世界をさわる」コーナーには、広瀬さんらによって選定された収蔵資料が、触察鑑賞資料（実際に手にとって感触を確かめられる資料）として常設されている。一部の資料はブラックボックスに入れて見えない状態にし、手触りだけで資料を鑑賞できるようにした。時間をかけてじっくりさわることによって、視覚だけでは気づかなかったさまざまなものごとを発見でき、「ものを介した自己との対話」につながっていく。

## 身体感覚でとらえるミュージアム

そして、二〇二〇年に東京パラリンピックと同開催されるはずだった本特別展がコロナ禍の影響で一年延期され、今年九月から開催されることになった。博物館における触察の意義を長年追究し続けてきた広瀬さんの研究活動の集大成となる特別展で、その展示設計を依頼された。

普段の仕事では、クライアントの意図や企画内容を図面やスケッチに落とし込み、打ち合わせでそれらを見せながら説明をおこなう。ところが、全員のクライアントである広瀬さんには、図面やスケッチに描いた内容すべてを言語に変換する必要がある。百聞は一見にしかずというが、一見を百のことばにしてみると、絵や図では描ききれず、本来は視覚伝達のためのサインやグラフィックも、身体感覚的に伝わるように工夫されていて、視覚偏重の現代社会に一石を投じる展覧会になることは間違いない。読者の皆さんもぜひ、視覚を捨てて民博へ出かけてみませんか？

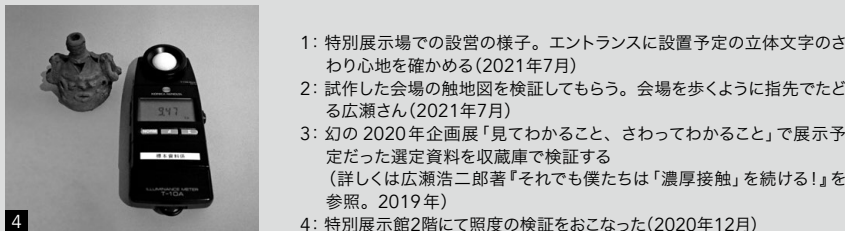
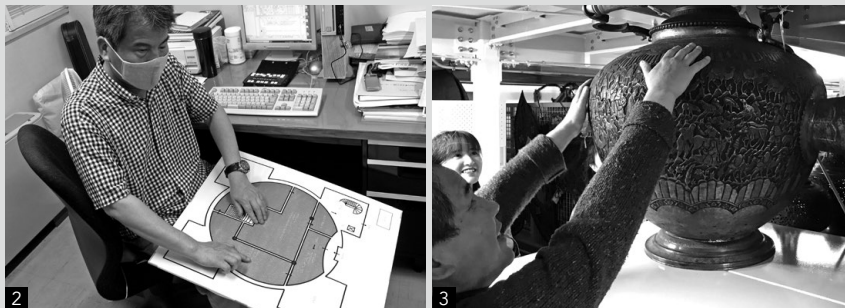
いない矛盾や思考の浅さが露呈する。このことは、視覚に甘んじていたデザインの仕事を直直すきつけかけとなった。

今回の特徴のひとつとして、この特別展ではすべての来館者に触察鑑賞を奨んでもらえるよう、一部を除く展示物にはあえて照明を当てず、会場全体も可能な限り薄暗い空間にすることを提案

した。普通の博物館であればまず却下される提案だが、特別展はあらたな展示演出の実験の場でもあるとする民博では、照度の実証実験をおこなううえで、実行委員会のメンバーや出版作家の賛同も得ることができた。広瀬さんの研究活動に発された作家や研究者の出版作品はどれも斬新で、もちろんすべての作品にさわるることができる。



準備中の特別展示場にて、1階吹き抜け空間に設置された巨大なさわれる絵画、間島秀徳作(Kinesis No.743 dragon vein)のさわり具合を検証する(左が広瀬さん、右が筆者、2021年8月)



- 1: 特別展示場での設営の様子。エントランスに設置予定の立体文字のさわり心地を確かめる(2021年7月)
- 2: 試作した会場の触地図を検証してもらう。会場を歩くように指先でたどる広瀬さん(2021年7月)
- 3: 幻の2020年企画展「見てわかること、さわってわかること」で展示予定だった選定資料を収蔵庫で検証する(詳しくは広瀬浩二郎著『それでも僕たちは「濃厚接触」を続ける!』を参照。2019年)
- 4: 特別展示館2階にて照度の検証をおこなった(2020年12月)

民博「探究ひろば」の「世界をさわる」コーナーは、「じっくりさわる」「見てさわる」「見ないでさわる」の3つのセクションから構成されている。写真は、資料とじっくり向き合うために椅子が設置されている「見ないでさわる」セクション。黒い壁の奥に隠された資料を手触りだけで鑑賞する(2012年)



2020年にKYOTOGRAPHIEでおこなわれた「二つの世界を繋ぐ橋の物語」展。パリ盲学校の生徒たちの内面を探る手がかりとして、写真を触察デバイスに変換したマリー・リエスの作品が展示された。このうち5点の作品が今回の特別展に出品される予定

暑くて食欲がないときには、刺激的なスパイス料理を食べたくなるという人も多いのではないだろうか。スパイスは飲食物に香気や辛味を加えて風味を増すための植物性物質の総称である。和食ではスパイスはあまり使われなと思われがちだが、食物の保存や風味付けを目的とするものとして、フサビやシヨウガ、ミヨウガのような薬味が多用されている。「みんぱく回遊」ではこれまで何度か食にまつわる展示が紹介されてきたが、今回は夏バテを吹き飛ばすスパイスをめぐってみよう。

## 世界の食を彩る

人類は古代よりスパイスを食用だけでなく、保存料や薬としても重用してきた。スパイスは交易によって原産地を離れた遠い世界まで運ばれる貴重な商品であり、大航海時代の立役者としても知られている。コロンブスが「発見」したアメリカからもたらされ、世界を大きく変えたものは、間違いなくトウガラシやトマト、カカオという新大陸を原産とする植物だろう。トウガラシは、今では多くの地域で欠かせないスパイスだが、それもアメリカ到達以降に広まったに過ぎない。それまで、辛味はインドを原産とするコシヨウによって担われていた。アメリカ展示では、世界に広まったトウガラシのさまざまな品種を見ることが出来る。中南米では生のトウガラシをすりつぶしてソースとして利用されてい

のも無理はないからである。ただし、それにはウコン（ターメリック）やクローブ、クミン、シナモン、アサフェティダなど数多くのスパイスによる無数の組み合わせがあり、その味付けは地域的にも宗教的にも、またカーストによっても多様である。南アジア展示では、日々の調理に不可欠なスパイス入れが二点展示されている。一般的な家庭で使われるステンレス製の丸形のスパイス入れと、真鍮製の小型のものである。マサラは代々女性のあいだに伝わる、その家の味を決める大事な調味料であり、手作りされてきた。スパイス入れの近くには、ホールスパイスを挽くための石臼や乳鉢もある。今では、既製品のマサラを使う人も増えているが、かつては乾季などに女性たちが集まり、ともにスパイスを挽いて数カ月分のマサラを作るといった習慣もあった。

東南アジアはスパイスの原産地として有名だが、辛味や刺激のあるものだけでなく、甘みを帯びたココナツミルクも味付けには重要である。アフリカから太平洋まで広がるココ

# みんぱく回遊

## スパイスをめぐる旅

松尾瑞穂  
民博 超域フィールド科学研究部

**A** ウコン (ミクロネシア連邦, H0010127)

**B** 平石臼とすり棒 (グアテマラ, H0153491, H0153492)

**C** トウガラシ(複製)

**D** スパイス入れ(インド, H0099112)

**E** 乳鉢 (インド, H0099173)

**F** 石臼 (インド, H0092544)

**G** ココナツミルク漉し (タイ, H0095525)

オセアニア展示 「島での暮らし」

南アジア展示 「都市の大衆文化」

アメリカ展示 「食べる」

東南アジア展示 「村の日常」

観覧券売場 本館展示場

Hからはじまる番号は標本番号です。



路上で売られているスパイス(インド、マハーラーシュトラ州、2012年)

るが、展示場には各地の平石臼(メタテ)と石のすり棒(マノ)も並んでいる。さて、わたしがインドを調査地にしていると言うと、「インドでは毎日カレーを食べているの?」と聞かれることがあるが、これはなかなか返答に窮する質問である。インドの家庭では毎日「カレー」を食べているわけではないが、我々が一般に「カレー味」として認識している、複数のスパイスの調合からなるマサラが料理に多用され、確かにほとんどが「カレー味」に感じられる

ヤシの汎用性の高さは、ほかの植物の追随を許さないものがある。ココナツウオーターや果肉はいうまでもなく、油やミルク、酒、酢にも加工されるし、殻や繊維もさまざまな用途に用いられている。まさに万能植物だといえるだろう。東南アジア展示場には、タイのココナツミルク漉しがある。なめらかで濃厚な味わいは、スパイス料理を和らげ、味に深みを出す効果をもつ。

### 用途は食にとどまらず

オセアニアでは、インド原産で南アジアの人びとの生活に欠かせないスパイスであるウコンが、着色剤料として使用されている。ヤップ島では、ウコンはココナツオイルと混ぜて、新生児や呪術師、死者、儀礼の踊り手の身体に塗ったりするという。種ではなく根茎で繁殖するウコンが、はるばるポリネシアまで分布しているのは、人びとがカヌーに乗せてわざわざ運んだからであり、それだけオセアニアの伝統社会でも、人生儀礼と結びついた貴重な植物であったと考えられる。

着色剤料としての利用以外にも、ウコンは多くの地域で消毒や解毒作用に優れた生薬としても知られている。インドの伝統医療であるアーユルヴェエダでは、喉が痛いときには、はちみつにウコンの粉をよく混ぜて舐めると効くとされている。読者のみなさんも一度試してみたいかがだろうか。

重要なお知らせ

新型コロナウイルス感染症拡大予防のため、本館関連の催し物について、本コーナーに掲載の情報も含め、急遽、予定を変更する可能性がございます。詳細につきましては、決まり次第みんなくホームページに掲載いたします。何卒ご理解のほど、お願い申し上げます。

お知らせ

本館講堂が、多目的な使用に対応できる「みんなくインテリジェントホール（講堂）」としてリニューアルしました。様々なイベントを予定しておりますので、ご期待ください。



特別展

ユニバーサルミュージアム さわる！「触」の大博覧会

さわって体感できるアート作品が大集合！本展では「歴史にさわる」「風景にさわる」「音にさわる」などのテーマのもと、さまざまな素材と手法を用いて、「触」の可能性を追求します。展示場に足を運び、手を動かす。来館者一人一人の身体から「ユニバーサルミュージアム」誰もが楽しめる博物館が始まります。



「とろける身体—古墳をひっくり返す」（制作：岡本高幸）

【申込期間】  
10月14日（木）10時受付開始  
申込フォームまたは往復はがきにて1通につき2名の応募まで。  
イベント予約サイトは「ちびちび」  
<https://entry-reservation-event.minpaku.ac.jp/>



ポップアップ絵本（デザイン：桑田知明）

■特別展会期中の毎週金曜にタッチツアー「あの手この手で特別展を楽しむ」（講師 広瀬浩一郎）を開催します。

■関連イベント  
ワークショップ  
「さわる」をデザインする  
ポップアップ本の魅せ方  
能動的にさわる行為によつて、新たな発見が得られる体験を共有しましょう。特別展示場の「さわる絵本」をさわって観察した後、それらとは異なるポップアップ絵本ならではの魅力、「さわって作る」仕掛けを紹介します。オリジナルのポップアップ作品も作りま

■左記の日に特別展出展者によるギャラリートークを実施します。  
9月4日（土）戸坂明日香  
9月20日（月・祝）北川太郎  
9月25日（土）真下弥生  
9月26日（日）前川紘士  
みんなく無料シャトルバスのご案内  
大阪モノレール「万博記念公園駅」とみんなくとの間の直通送迎バスを特別展「ユニバーサルミュージアム」の会期中に運行します。  
運行日 9月2日（木）～11月30日（火）の土曜・日曜・祝日  
1日11往復 所要時間約10分、無料  
運休日 平日、10月30日（土）、31日（日）、11月3日（水・祝）、6日（土）、7日（日）  
※急遽予定を変更する場合があります。  
※新型コロナウイルス感染症拡大予防のため、座席数を従来より減らして運行します。



インドボダイジュに布が掛けられ、聖木として祀られている（撮影：福内千絵）

巡回展  
「復興を支える地域の文化 3・11から10年」

本展は、2021年3月～5月に本館で開催した特別展を巡回展として開催するものです。震災・原子力災害から地域がどのように復興を目指しているか、地域文化がどのような役割を果たしているか、本館での展示のツェッセンスを、モハイル展示を中心に展示します。  
会期 9月29日（水）まで  
会場 国文学研究資料館1階展示室  
※事前予約制

企画展  
「ピースアイヌモシリから世界へ」

本展は、2017年3月～6月に本館で開催した特別展を巡回展として開催するものです。本館および国立アイヌ民族博物館所蔵の民族資料と北海道内の考古資料などを中心に、世界における多様なアイヌの歴史とその役割について紹介します。同時に、世界のピースとアイヌのピースを比較することによって、アイヌ文化の特徴を世界に発信します。  
会期 9月18日（土）～11月21日（日）  
会場 国立アイヌ民族博物館  
特別展示室

刊行物紹介

■吉岡乾 著  
『フィールド言語学者、巣ごもる。』  
創元社 1,980円（税込）



フィールド言語学とは、言語使用の現場で採ったデータを基に言語学的考察をする学問である。人がいれば言語がある。日常にも言語は溢れている。この本では、身近な言語現象を漫遊しつつ、言語学の門前まで案内する。

■山本紀夫 著  
『高地文明 —「もう一つの四大文明」の発見』  
中央公論新社 1,155円（税込）



四大文明は、大河のほとりて生まれたとされるが、熱帯高地でも独自の文明が誕生し、開花している。本書はアンデス、メキシコ、チベット、エチオピアなどの熱帯高地で生まれ、発展してきた古代文明を紹介する。

みんなくゼミナール

参加形式  
①会場参加 みんなくインテリジェントホール（講堂）（定員160名）  
②オンライン（ライブ配信）（定員300名）  
・要事前申込、先着順、参加無料  
イベント予約サイトはこちら  
<https://www.minpaku.ac.jp/event/lecture/seminar>  
・当日参加申込あり（会場参加のみ、定員30名）

第513回  
9月18日（土）13時30分～15時（13時開場）  
【特別展「ユニバーサルミュージアム さわる！「触」の大博覧会」関連】  
健常者とは誰か  
——琵琶なし芳一の話

講師 広瀬浩二郎（本館 准教授）

【申込期間】  
■一般受付 9月15日（水）まで  
※友の会電話先行受付は終了しました。  
※第513回につきましては、参加形式は②オンライン（ライブ配信）のみです。

講師 大石徹（芦屋大学 教授）  
黒澤浩（南山大学 教授）  
篠原聰（東海大学 准教授）  
広瀬浩二郎（本館 准教授）

特別展「ユニバーサルミュージアム」では、触覚の潜在力を引き出すために、会場を暗くしています。視覚情報を遮断することで、私たちは何を覚えているのでしょうか。各地の実践事例に基づき、「ユニバーサル」の真意を考えます。

【申込期間】  
■友の会電話先行予約（定員30名／会場参加対象）  
9月13日（月）～9月17日（金）  
【申込先】  
国立民族学博物館友の会（千里文化財団）  
■一般受付 9月21日（火）～10月13日（水）



東海大学でおこなわれた高校生対象の彫刻メンテナンス体験会（2019年8月）

第514回  
10月16日（土）13時30分～15時（13時開場）  
【特別展「ユニバーサルミュージアム さわる！「触」の大博覧会」関連】  
ユニバーサルミュージアムとは何か  
——暗闇で「野生の動」を取り戻せ

各イベントについて詳しくは、みんなくホームページをご覧ください。

お問い合わせ 国立民族学博物館 広報・IR係  
電話 06-6878-8560（9時～17時、土日祝を除く） FAX 06-6875-0401  
お問い合わせフォーム <https://www.minpaku.ac.jp/information/contactus/form>



友の会

友の会講演会

当面のあいだ、友の会会員に限定して開催します（要事前申込、先着順）。受付フォームは友の会ホームページ内にあります。

第516回 9月4日（土）13時30分～14時40分  
金曜日には墓地で会いましょう  
——イランにおける死の多義性と「英霊」

講師 黒田賢治（本館 特任助教）  
身近な人を亡くす経験は、生きているうえでどうしても避けられないことのひとつです。さまざまな死の形があるなかで、その解釈も向き合い方も異なってきます。今回の講演では、中東の国イラン・イスラム共和国における死をめぐる解釈について、特に「英霊」とされた人びとへの弔いに目を向けながら探っていきます。

参加形式  
オンライン（ライブ配信）（定員100名）  
※受付フォーム  
<https://www.senri-f.or.jp/516tomo/>

第517回 10月2日（土）13時30分～14時40分  
【特別展「ユニバーサルミュージアム さわる！「触」の大博覧会」関連】  
さわる名画ができるまで  
——その多様性と可能性

講師 辰巳明久（京都市立芸術大学 教授）  
京都市立芸術大学の学生有志  
広瀬浩二郎（本館 准教授）

京都市立芸術大学では、ビジュアル・デザイン専攻3年生の進級制作課題として、「絵画の立体化」に取り組んでいます。これまでも視覚障害教育・福祉の文脈で「さわる絵画」が作られてきましたが、芸大生の「さわる絵画」は単なる視覚から触覚への置換ではありません。視覚芸術の再解釈、名画の

再創造にトライした学生たちに、制作の裏話を紹介してもらいます。

参加形式  
①みんなくインテリジェントホール（講堂）（定員160名）  
②オンライン（ライブ配信）（定員100名）  
※受付フォーム  
<https://www.senri-f.or.jp/517tomo/>

みんなく友の会オンラインレクチャー

みんなく研究者によるミニレクチャー動画を友の会ホームページ内で公開しています。

『季刊民族学』運動シリーズ  
先生、教えてください！ vol.1 川瀬先生

話者 川瀬慈（本館 准教授）  
※公開ページ  
<https://www.senri-f.or.jp/category/events/online/>

お問い合わせ 国立民族学博物館友の会（公益財団法人千里文化財団）  
電話 06-6877-8893（9時～17時、土日祝を除く） FAX 06-6878-3716  
[https://www.senri-f.or.jp/minpaku\\_associates/](https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/) E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp





# ペルーより日本の祖先を 追い求めて

ダニエル・ダンテ・サウセド・セガミ  
立命館大学准教授

瀬上<sup>せがみ</sup>政市はわたしの曾祖父で、一九〇六年に、二一歳で熊本県からペルーに移住し、その後の人生のほとんどを、首都リマの北にあるチャンカイという

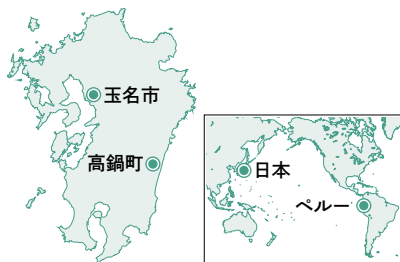


熊本県玉名市の親族を初めて訪問。曾祖父の姪(前列左から五番目)に会う(2001年)

村で過ごした。曾祖父に会ったことはないが、家族より聞かされていた話から、曾祖父のやってきた場所や、海に向かう側にいる親戚たちの生活に、ずっと思いを馳せてきた。わたしが留学生として来日した目的のひとつは、曾祖父の出身地を訪ねることであり、これがきっかけとなって、今では日系ペルー人家族のライフ・ヒストリーに関する研究に取り組んでいる。

## 自らの起源を知り、 郷土の暮らしを体験する

曾祖父の兄弟たちのうち、ふた家族が現在まで続いている。うち一軒は熊本県北部の玉名市在住で、もう一軒は宮崎県の中央に位置する高鍋町<sup>たかべちやう</sup>に住んでいる。二〇〇一年、わたしは玉名市の親族に会うことができた。親族は曾



祖父の姉妹が眠る寺や、曾祖父が住んでいた家の見える場所に連れて行ってくれた。海に近い家だと聞いていたが、実際には海にさほど近くない谷間にあったことは、大きな驚きだった。このときから、ペルーの家族から聞いていた話は真実なのか、または年月を経て別の話ができあがってしまったのか、考えるようになった。

二〇〇四年に熊本県の奨学金を得て、熊本大学考古学研究室で一年間勉強する機会を得た。この期間、わたしは熊本県の興味深い側面をふたつ知ることができた。ひとつは方言だ。いくつか地元のことを覚えたが、「肥後<sup>ひご</sup>もっこす」もそのひとつで、寡黙で頑固な熊本男児を指すという。これが、偶然なのか、ペルーのおじたちが揃って持ち合わせている特徴だったのでとも面

わたしのルーツを訪ねてみました



火の国まつりにて。右端が筆者(2004年)

白かった。おばたちの話を黙って聞き続け、発言は必要最低限。一方で、何かを判断するときには頑として譲らない。

もうひとつの発見は、地元の祭りだ。熊本でいくつかの祭りに参加したが、なかでもとりわけ大勢の人びとが参加するのが、火の国まつりだ。この祭りの雰囲気は、ペルーの各地域でおこなわれる宗教関連の祭りによく似ている。たくさんの人が集まり、地域交流の機会としても重要な役割を果たしている。また、花火大会も両国に共通

する催しだ。人びとがこれらの祭りを、地域の行事としていかに取り入れてきたのか、また、祭りをとおしてどのようになり、コミュニティが形成されていくのかは興味深いテーマだ。

## 祖先の墓を探して

すでに玉名市を訪れたことのあるペルーの親族から、「瀬上」の墓が玉名市にあると聞いていたが、わたしは見



瀬上政市(前列右端)、妻とその子どもたち(瀬上家のアーカイブズ、1940年代)

ことがなかった。おじのひとり、祖父の爪と髪をその墓に持っていったそうなのだが、玉名市の親族は墓のことを知らないという。

ペルーのおじたちを頼って、宮崎県高鍋町に住む曾祖父の兄の孫と連絡がついた。熊本から宮崎に引越した際に、一族の墓も持っていったそうので、彼を訪ねると墓に連れていってくれた。そこで彼らが墓を掃除する様子を見て感動した。ペルーに住む曾祖父の子孫も墓掃除をする。しかし、彼らはそれが、もとは日本の習慣であることを知らないのだ。

## 歴史を取り戻す

二〇〇一年以降、玉名市の親族を何度か訪ねた。あるとき、ペルーにある写真や手紙の話をしたところ、親族は曾祖父から届いた手紙を見せてくれた。戦



宮崎県高鍋町にある瀬上家の墓前にて(2014年)

時中、日本の家族に食糧を仕送りしていたこと、曾祖父の妻が亡くなったことなど、当時の様子を知ることができた。



玉名市の親族を訪問したわたしの両親(2014年)

二〇一四年には両親を玉名市に連れて行った。特に母は、家族からの聞き伝えでしか知らなかった場所をついに訪れたとあって、感動もひとしおだった。ペルーの日本人移民の子孫にとって、祖先の地に帰るということは、自身のアイデンティティがどのように形成されたのかを知る重要な機会である。それは同時に、日本の親族にとっても、異なる国の習慣を知り、その文化を理解する大切な機会となるのだ。

# 縄文人の植物資源利用

きき ゆか  
佐々木 由香

金沢大学特任准教授

縄文時代、人びとは植物資源をどう選択し、生活のなかでどう利用してきたのか。それを知る手がかりになるのは、約8000年前に使われていたかごの遺物だ。今号ではそれらを科学的に解析し、復元製作することでわかってきた縄文人の多彩な植物利用について見ていこう。

植物を用いた製品や構築物は、台地上に立地する遺跡では分解されて残りがないため、考古学ではやや特殊な遺物や遺構として扱われてきた。しかし、一九八〇年代以降に、低湿地遺跡とよばれる地下水位が高い遺跡の調査事例が増えて植物の検出例が増加した。さらに今世紀に入ってから、植物の種類レベルでの同定方法が開発され、分析技術が進展して、単に自然界の植物を利用しただけではない縄文人の資源利用の実態が明らかになってきた。そのひとつがかごや縄などの編組製品である。

## 八〇〇〇年前の出土かごから見える情報

編組製品とは、文字どおり「編む」と「組む」技法によって作られた製品を指す。約八〇〇〇年前の縄文時代早期、佐賀県東名遺跡からは、国内ではもっとも多い約七四〇点の編組製品が出土し、大多数がドングリ類を水漬けるために使われていたかごであった。東名遺跡では、現代につながる編組技法がほぼすべて確認できたほか、形状によって素材植物や技法が使い分けられていることが認められた。

例えば、もっとも多く出土した高さ七〇センチメートルほどのかごは、下部をムクロジやイヌビワといった木材のへギ材を使って網代を編み、途中でツル植物のツヅラフジを用いてタテ材を何本か

## 素材となる植物の管理

縄文時代の編組製品を復元して見えてきたのは、素材植物の資源管理である。材料には、集落周辺で十分な量が確保できる身近な植物で、かつ編組製品に適した植物が使われている。

しかし、木材をへギ材にするには、根元から一メートルぐらいの高さまで、かつ素性が良い幹しか粘りがなくて使えない。ツヅラフジなどのツル植物は、地上から巻き上がるツルではなく、分枝しない地表面に真っ直ぐに這うツルを使い、ウドカズラは枝わかれせず空中に垂れ下がる根（気根）を、ササ類は一年目の葉がついていない素直な部分を使うなど、編組製品に使える部位は限定される。

また、編組製品の材料を伐採したり採集するには季節も限られてくる。現代の我々が縄文時代のかごを復元製作すると、素材となる植物は見つけられても、かごの材料として使える素材を量的に揃えるのは簡単ではなかった。縄文時代の編組製品には、素材の特性に合わせた良い材料が使われており、良い材料を確保し続けるには、人間が植生を常に管理していかないといけない。編組製品の材料から得られた知見は、技法や形態の観察のみでは気づけない当時の植物管理の実態であった。



東名遺跡から出土したかご(左)とその復元品(右)。色の濃い部分がツヅラフジ [提供: 佐賀市教育委員会(左)、あみもの研究会(右)]

まとめるともじることタテ材の本数を減らし、上部はまとめたタテ材でござ目に編んで、上端に向かって窄まる形状をしていた。さらに全体を作り上げた後に、かごの口を閉じる紐をかける「耳部」をツヅラフジで足していた。一見、機能的に見える素材と技法の使いわけであるが、地のへギ材の薄黄色に対して、深い紫色（生の状態では濃い緑色）のツルがアクセントになり、デザインも意識していたと考えられる。技法から見ても、ツルの部分をあえて複数の段としたり、網代の部分においてもかごとしての機能とは直接関係のない波形網代や連続拵網代にしたりと複雑な技法を使っていた。



ウドカズラの気根(2014年)

## 植物資源の多岐にわたる利用法

縄文時代早期の初め(約一萬年前)ごろになると、定住的なムラでは有用な植物資源を選択的に利用していた。木の実だけでなく、縄文時代に栽培化したと考えられているダイズやアズキの祖先野生種であるマメ類や、外来の栽培種であるウルシやアサなどの利用が見え始める。早期の終わりごろには、ムラのなかや周りに有用なクワを栽培して林とし、その外には陽樹が多く生育する二次林が広がっていた。

縄文時代の植物資源利用の特徴は、クワならば果実を食料に、木部を構造部材や道具に利用し、ササ類ならば稈を編組製品に、種子を食用にするというように、有用な資源のさまざまな部位を利用する点である。世界では同時期にイネ科の穀類を栽培し、農耕をおこなうようになったが、縄文人は食料の増産のみを志向したのではない。縄文時代の人びとは、森林から人間にとって有用な植物資源を見いだして、食料を含め、木製品や編組製品などといった多様な利用に主軸をおいた生活システムを作り上げていったと考えられる。



かごの素材となる1年目のアズマネザサのみを採集している場面の復元画(画:石井礼子、提供:国立歴史民俗博物館)

こうした縄文人の「美」の意識は、時代が進むにつれてより顕著になる。約四〇〇〇年前の縄文時代後期の福岡県正福寺遺跡では装飾的なかごが作られており、機能とは直接関係がないチェーンステッチのような飾りが施されていた。

# 軍事政権下の名作

山本 文子 やまもと あやこ  
三重大学非常勤講師

ゆく時の流れをも表現する。毎年水祭りの時期にテレビで放送され、世代を超えて親しまれている国民的映画である。

## 水祭りと言葉と酒

本作は一九五七年の親世代の出会いから始まる。ピアノストで「ミョーマ楽団」を率いる青年ニエインマウンは裕福な女性キンキンターに歌を教えるようになる。彼女と恋仲になるものの、彼女の母親は身分の違いを理由に交際を反対。二人は駆け落ちの約束をするが、不運が重なりニエインマウンは約束の場所にあらわれない。失意のキンキンターは許嫁と結婚し、腹いせに自分の結婚式にミョーマ楽団をよび、かつて彼が自分にプレゼントしたラブソングを演奏させた。ニエインマウンはその屈辱から酒に手を出すようになる。

ニエインマウンは別の女性と結婚し一人息子をもうけるも、妻をすぐに亡くし、さらに酒に溺れる。しかし彼を心配した友人の助けもあり息子はピアノストを志し、キンキンターの娘も歌手へと成長。親世代の因縁を知らずに彼らは互いに惹かれ合う。

二世代に渡る音楽家たちの中心にあるのがミョーマ楽団である。これは現在の楽団で、一九二五年に芸術の都マンダレー

軍事政権下での映画産業については不明な部分も多いが、ビルマ式社会主義に基づく国民統合という価値観のもと、新聞などと同様に厳しい検閲を受けたことは確かだ。脚本と完成した作品の二段階で検閲を受け、政府にとって不都合な情報を取り除いたものだけが最終的に映画館で上映された。

不都合な情報とは、国民を混乱させ、国民統合を妨げるような内容である。例えば政治批判、ビルマの伝統文化や仏教に対する冒瀆、また治安を乱しうる反道徳的な内容を指す。さらに検閲官は、それらの描写のみならず、作り手も予期しない理不尽な理由で、気に入らない箇所を削除させた。その結果、作り手たちは安全無害な作品作りへと向かうことになる。仏教的な道徳を推奨するものは当然のこと、わかりやすい恋愛もの、とくに三角関係ものが増えたといわれる。本作のようにビルマの伝統文化（楽団や劇団など）をテーマとして取り上げたものも多い。例えば、楽団員を中心に親友二人が一人の女性を愛してしまう三角関係を描いた「モンシェエー」（一九七〇年）はその代表作だ。

その意味で「水祭りの雨」は当時の検閲事情を反映した、きわめてビルマ的な映画といえるだろう。

水祭りでは地元住民によって軽食(写真はノーカウスエとよばれる牛乳麺)が無料でふるまわれる。こうした行為は仏教徒にとって徳を積む行為とされる(ヤンゴン、2010年)



## 「水祭りの雨」

原題：ပဲခူး  
1985年/ミャンマー/ミャンマー語/126分/DVDなし  
監督：マウンティンウー  
出演：ネーアウン、キンタンヌーほか



ミャンマーの国花であるパダウの花。本作冒頭では、水祭りの最中、キンキンターがパゴダ(仏塔)でパダウの花を落としてしまい、それをニエインマウンが拾いあげるシーンがある。劇中でしばしば登場するパダウの花は2人の出会いを常に思い出させる(ヤンゴン、2020年)

上：タマダ映画館。自己検閲の結果、安易なコメディ映画も激増した  
下：ヤンゴンにある映像製作会社。1990年代から約20年間、検閲項目を気にしながら作られたビデオ映画が全盛期を迎えた。ダウンタウンにある35番通りには、かつてこのような製作会社がひしめき合うように並んでいた(ともにヤンゴン、2015年)



## 軍政下での映画製作

誕生し約一〇〇年の歴史を誇る。彼らの活動の真骨頂が水祭りでの演奏で、ミョーマ楽団は水祭りの代名詞でもある。劇中も音楽が大部分を占めており、この映画を観ることは、ミョーマ楽団の音楽を楽しむことそのものであるといえよう。もうひとつ触れておきたいのが酒に溺れる男性である。これはビルマ映画で繰り返し登場するモチーフである。常時ウイスキーを傍らに置き、生活にも支障をきたしている重度のアルコール依存者として描かれる。飲酒は、仏教の五戒におけるほかの過ち(殺生や妄語など)の引き金になるため、五戒のなかでもっとも罪が重い。こうした男性像は飲酒の恐ろしさの反面教師であり、同時にその誘惑に抗えない人間の弱さも伝えている。

本作においてビルマの伝統文化や宗教観が色濃いののは、軍事政権下に製作されたことが関係しているだろう。当時この映画が大ヒットしたという事実、そして今でも広く支持されているという事実は興味深い。

# 遺跡に 名前をつけるとき

おわたに いくえ  
大谷 育恵  
民博 機関研究員

モンゴルで遺跡の調査をおこなっていると、しばしばその遺跡に名前をつける機会がある。というのも、モンゴルでおこなわれる埋蔵文化財の調査の多くは学術調査なので、これまで発掘調査がおこなわれたことのない遺跡を試掘調査したり、調査が手薄な地域を踏査したりすることが多いためである。

それではあらたに遺跡に名称をつけることになった場合どうするかというと、その近くにある遊牧民のゲルを訪ねて、古老から「あの辺りは何と呼ばれているのでしょうか？」と聞き取りをして名づけることが多い。しかし、遺跡名を登録する都合上困ってしまうのは、同じ遺跡名称になりがちということだ。モンゴルには、その地形に由来する自然地名が多い。

ある研究によると、モンゴルの地名に含まれる単語のうち、①地形（山、川、泉など）、②位置・方角・形状（～の南、大きな～など）、③色彩（赤い、黒いなど）という土地を形容する語が全体の60パーセントを占めるという。なかには畜産文化と深く結びついているモンゴルならではの「オーシグ（肺）」、「ズルフ（心臓）」など内臓に関連する語もあるが、これも岩肌のざらざらした質感と色が肺のよう、心臓のような丸い形、といったように土地を形容することばである。したがって、「オラーン・ハド（赤い岩崖、赤峰）」のような呼称は各地にあり、歴史的に古代より漢字好字2字で表記するよう変形を受けてきた日本の地名に比べると、バリエーションが多いわけではない。もちろんモンゴルにも土地に

まつわる伝承など豊かな文化はあるのであるが、意図せず同じ遺跡名になってしまうことがある。遺跡を登録するうえでは同じ名称の遺跡がいくつもあることは都合が悪く、例えば、ゴル・モド遺跡（「特別な木」の意）は偶然同名の遺跡がふたつあり、80キロメートル離れたまったく別の遺跡であるものの、その両方が匈奴時代の王陵級の墓地なのでややこしい。

モンゴルでは同じ名称の遺跡が生まれがちという点はどうしようもなく、今後さらに多くの遺跡が登録されていくにしたがって不便な例も増加するだろうが、位置情報の記録の面ではGPS測位データの活用で登録が容易となり、文化遺産登録地図の作成において大きな助けとなっている。

しかしながら聞いてみると、学術の枠を超えて一般に遺跡地図を公表することには慎重にならざるを得ないという。観光はモンゴルの成長産業のひとつであり、そのなかで遺跡探訪は魅力的な観光コンテンツなのであるが、遺跡情報の公開は一方で盗掘被害を招くおそれがあるからだ。

加えて、草原地帯にも開発の波が押し寄せている。遺跡とは地球上に残る過去の人間活動の痕跡と定義されているけれども、実際には研究や文化財行政の対象として記録・登録されなければ「遺跡」ではない。したがって、認知されない遺跡は保護されることもなく、消滅することになってしまう。鉱山開発や風力発電の開発が急速に進むなか、遺跡の登録もそのスピードをいかに上げてゆけるかが課題となっている。

# 『月刊みんぱく』は 国立民族学博物館の広報誌です。

世界の文化とみんぱくの展示、研究者の活動について紹介しています。本誌は定期購読が可能です。また、友の会会員の方には毎月お届けします。

## 国立民族学博物館友の会

みんぱくの活動を支援し、積極的に活用するために作られました。本誌購読のほかにも、各種催しなど、さまざまなサービスがあります。

定期購読、友の会については国立民族学博物館友の会(千里文化財団)までお問い合わせください。

電話 06-6877-8893 (平日9:00~17:00)

[https://www.senri-f.or.jp/minpaku\\_associates/](https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/)

## 月刊みんぱく 2021年9月号

第45巻第9号通巻第528号 2021年9月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1

電話 06-6876-2151

発行人 園田直子

編集委員 三島禎子(編集長) 池谷和信 上羽陽子

岡田恵美 齋藤晃 吉岡乾

制作・協力 公益財団法人 千里文化財団

印刷 能登印刷株式会社

\*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報・IR係をお願いします。

\*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

この雑誌は、再生産可能な大豆油由来のインク、環境に配慮したFSC®認証材および管理原材料から作られています。また、読みやすくするために、色づかいやレイアウトなどに配慮しています。



# 月刊みんぱく

2021年

9月号

## 編集後記

今秋の特別展実行委員長の広瀬さんは、展示の課題をコロナ禍の状況に例えて「視覚優位・視覚偏重の人類への問いかけ」であると書いている。見えないうる世界の感覚を伝えようとする展示をいかに受け止めるのか、観賞する側も試される。

そもそも民族学博物館は、文化人類学や民族学の課題である「文化の翻訳」を実現するための装置である。そこに「触」の可能性を探るというのは、あらたな「翻訳」にはほかならない。

ひるがえってコロナ禍を「翻訳する」とどう世界が見えてくるのかという問題は、地球に生きるわれわれの最大の関心事にもなっている。各分野の研究から井戸端会議にいたるまで、さまざまな説が飛び交っていて、何を根拠にどう理解したらいいのかわからない。まるで視覚を奪われた世界にいるかのようである。

しかし暗闇のなかで光にすぎり、何かを見ることだけが理解ではないことを特別展は問いかけている。ともにあり、共感し、感じとることから、ものごとの本質を知ること積極的に体験したい。(三島禎子)

次号の予告 10月号

特集「渋沢家と故郷の民具」(仮)

## 国立民族学博物館 National Museum of Ethnology

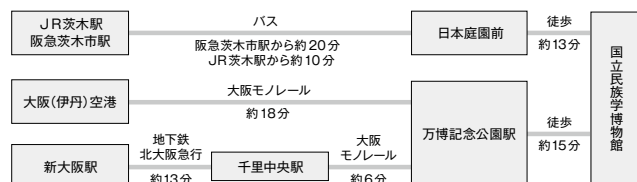
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1 電話 06-6876-2151

開館時間 10:00~17:00(入館は16:30まで)

休館日 毎週水曜日(水曜日が祝日の場合は翌日が休館日)  
年末年始(12月28日~1月4日)

### 主要ターミナルからのアクセス

本館までの交通手段はいくつか方法がありますが、主要ターミナルからのアクセスには、次の方法が便利です。



みんぱくホームページ

<https://www.minpaku.ac.jp/>





## 2022年 国立民族学博物館オリジナルカレンダー 躍動するインド世界の布

2022年のオリジナルカレンダーは、まもなく開幕する企画展「躍動するインド世界の布」の展示資料から選びました。人生儀礼における贈与品、神がみへの奉納品、社会運動のシンボルなど、多様な布の世界をお楽しみいただけます。

### 企画展「躍動するインド世界の布」

会期：2021年10月28日(木)～2022年1月25日(火)  
場所：本館企画展示場



定価 1,320円〈税込〉

国立民族学博物館友の会 会員価格 1,188円〈税込〉

サイズ 25cm×25cm (開くとタテ50cm×ヨコ25cm)  
オールカラー 28頁 中綴じ

- ◆5冊以上まとめてご購入の場合は、1冊1,056円〈税込〉です。
- ◆通信販売の場合、別途発送手数料が必要です。

お問い合わせ

- 国立民族学博物館ミュージアム・ショップ
- オンラインショップ「World Wide Bazaar」

e-mail: [shop@senri-f.or.jp](mailto:shop@senri-f.or.jp)

※水曜日定休

<https://www.senri-f.or.jp/shop/>